9 研究の成果と課題

図画工作科では，「新たな価値を創造する力」の育成に向けて，研究仮説を「「模倣」する活動によって，創造的な表現と鑑賞活動が促進され，学びの意味と価値をつくりだす子供の育成につながる。」とし，小学校高学年における「音」を題材とした表現活動の実践を行った。授業の中で子供たちは，目には見えない「音」に形と色を与え，絵に表す活動に取り組んだ。このような抽象的な題材に対する高学年児童の創造的な表現活動を促進する手立てとして，単元の導入に「音」や「音楽」をテーマに制作された他者の作品（芸術作品及び友達の作品等）を鑑賞し，模倣する活動を設定した。この経験を通して子供たちは，他者の表現に対して生まれる共感や違和感に触発され，自分の表したい形や色，配置等のイメージを取り出し，それらのイメージを組み立てる活動へと創作活動が発展的に展開するように単元を構成した（図１・２）。

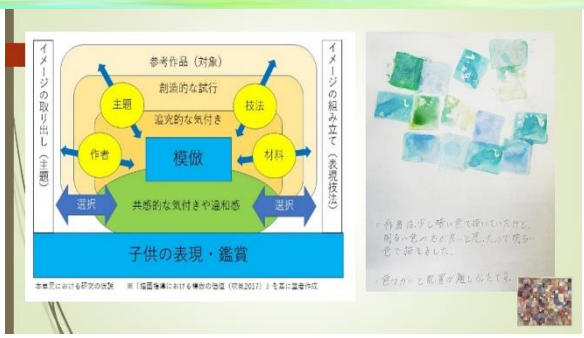

図１　本単元イメージ

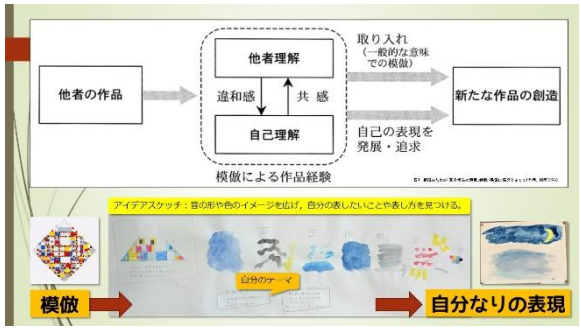

図２　本単元の模倣イメージ

芸術作品や友達の作品を鑑賞し，模倣する活動を通して，子供たちは作品の造形的特徴（形，色，配置，組合せ等）など，様々な気付きや理解を深めている姿が見られた。導入段階では，作品の特徴をできるだけ細かく写実的に描き写すことに集中していたが，「この線，音楽に合っていていいね。（共感）」「なんで同じ形ばかり並べたのかな？（疑問）」「なんか色が暗すぎ，私ならもっと明るい色にするのに。（違和感）」「これ描き足してみたよ。いいでしょ！（工夫）」など，友達との鑑賞交流をきっかけに，次第に「音」に対する自分のイメージに近付けるような姿が見られるようになった。

本実践における「模倣」とは，単に対象を写し取るだけの行為ではなく，他者の制作の意図や工夫を理解しながら，自分自身に内在する表したいものや表し方といった自己表現の起点が成立させる働きを担っていたと実感できた。

模倣による他者理解が，自己内イメージとの対比を引き起こし，その過程で取り出したいくつかの造形的なイメージを取捨選択した結果として，表したい主題や自らの独自性に対する気付きが促され，子供たちは自分なりのイメージを組み立てながら，形や色のない「音」を絵に表すという活動に取り組むことができたのではないかと考える。

このような学びを通して，子供たちの「なぜ」「どうして」「どうすれば」といった追究的な気付きと発展的な思考が促され，「私は」「私なら」というつくりだす喜びへの主体性が高まることによって，新たな造形活動に対する創造性の涵養し，子供自身が創造的な表現活動の意味や価値の発見することができるのではないかと考えている。

10 実践の課題と次年度への展望

石橋・岡田ら（2004）が「自分への気づきこそが，模倣活動に含まれる創造へとつながる」と示唆している。自分とは異なる他者からの触発と模倣による他者と自己の解釈を深化する教育実践を，より効果的に幼少期から積み重ねることができるようにカリキュラムをデザインしていくことが今後の課題だと考えています。また，「模倣」という行為によって引き起こされる自己の発見が，「批判的思考（現状を客観的に捉える力）」や「敏捷性（新しい発想をどんどん試していく力）」など，新たな価値を創造する力につながる資質・能力と，どのように関係付けることができるのかという視点で本実践の仮説を捉え直し，子供自身がその発現を自己調整するための鑑賞活動や振り返りの場を単元の中に位置付けていくことが重要だと考えている。創造的な表現活動の中で，どのようなイメージを取り出し，どのようにイメージの組み立てを行ったのか，その過程を子供自身が省察し，自分なりの造形的な見方や感じ方の広がりや，新しい価値を創造することの意味をより強く意識することができるような実践に取り組んでいきたい。

図３　今後のイメージ